

シオニズムから新ユダヤ部族主義へ

From Zionism to Jewish Neo-tribalism

岡野内 正

目次

はじめに

1. 「反ユダヤ主義」的ユダヤ人のユダヤ主義
2. 新部族主義的ユダヤ主義
3. ユダヤ民族主義からユダヤ部族主義へ
4. ディアスポラ主義
5. 「イスラエルへの帰還」から「イスラエルからの帰還」へ
6. パレスチナ環境の危機とシオニズム

おわりに

はじめに

2009年1月のガザの事態に見られるように、イスラエルにおけるシオニズムは、ますます明らかに、凶暴化してきた。このように凶暴化してきたシオニズムの無毒化あるいはそもそもシオニズムそのものの解消はいかにして展望できるだろうか？

シオニズムを生み出したユダヤ思想（ユダヤ教の伝統にねざした思想的営為）の中には、ユダヤ・ナショナリズム的な流れの登場に対応する、次のような二つの方向の反シオニズム思想を見出すことができる。

- ① シオニズムを否定してラビ・ユダヤ教のディアスポラを積極的に肯定するユダヤ教の伝統に根ざした非暴力主義のユダヤ主義。現世におけるユダヤ教徒あるはユダヤ民族のディアスポラを肯定することによって、ユダヤ国家の主権を否定し、パレスチナのアラブ人との共存を展望する。これには、ネトウレイ・カルタ (Neturei Karta) などの反シオニズムの正統派ユダヤ教の諸派、さらに、それを理論的に正当化しようとするボヤーリン兄弟のディアスポラ論などが含まれる。（詳しくは、Rabkin 2006、Boyarin & Boyarin 1993=2008 参照）。
- ② シオニズムだけでなく、ユダヤ教をも否定し、ユダヤの伝統の全体を、カナーン時代の太古のパレスチナを単位とするカナーン・ナショナリズムに包摂することによって、ユダヤ国家の主権を否定し、パレスチナのアラブ人との共存を展望する。いわゆるカナーン主義 (Canaanism, Canaanites Movement) という考え方もある。（さしあたり、Ben-Rafael & Peres 2005:34-36、エヴロン (Boaz Evron) らの現代カナーン主義の著作のサイト、(http://www.geocities.com/alabasters_archive/canaanism_solutions_problems.html : 2008年11月2日取得) を参照)。

このうち、①は、ユダヤ・ナショナリズムにおける血の契機、②は土の契機に注目して、もっぱらそれらのどちらかのみを強調することによって、すぐれて近代的で排他的なユダヤ・ナショナリズムであるシオニズムの乗り越えを図るものと言えよう。だが、①も②も、現実政治を動かす思想としては、ほとんど力を持ちえていないのが実情である。その理由

については、ネイションとエスニシティに関する論争をふまえた理論的な視角を整理したうえで、シオニズムのみならず、マルクス主義の流れをも含む、ユダヤ思想の全体の流れを視野に入れた実証的な研究が必要となるだろう。

筆者は、かつてナショナリズムにおける血の契機と土の契機を新しく組み替えることによって、ナショナリズムの排他性を超える可能性を示すものとして、「新部族主義」というモデルを提示した（岡野内 2008－2009、2009）。ここでは、ユダヤ・ナショナリズムにつながる諸要素から、シオニズムを越える、新しい部族主義的ユダヤ主義が生まれてくる可能性について、おおざっぱな見取り図を描くことによって、検討してみたい。

1. 「反ユダヤ主義」的ユダヤ人のユダヤ主義

まず、イスラエル政府のアラブ系住民に対する反人権的な政策に対する激しい批判ゆえに、シオニストによって「反ユダヤ主義的」といわれたノーマン・フィンケルスタインに注目したい。チョムスキーらに支持されたフィンケルスタインのイスラエル政府批判は、ハンナ・アレントらのシオニズムに懐疑的なアメリカのユダヤ系左派知識人の系譜に属する。その論述を分析することによって、父母の倫理観への誇りとホロコースト体験を含む歴史を受難ととらえて、ユートピア的未来を展望する日々の道徳的実践につなげるという内容をもつ、いわば強烈なユダヤ主義を確認することができる。それは、ネトウレイ・カルタのような正統派ユダヤ教の中のグループにも共通する、反シオニズム的ユダヤ主義であった。（詳しくは、岡野内 2008－09 参照）

2. 新部族主義的ユダヤ主義

このような反シオニズムのユダヤ主義は、たしかに、人々を社会的実践に駆り立てる強い力を持っている。それは、シオニズムの中にある、共通の出自と伝統、そして、自分の出自につながるトラウマ的な歴史を尊重したうえで、歴史的不正義を正していきたいという感情と共通するもののように見える。

とすれば、このようなユダヤ主義が、国民国家的な枠組みに絡めとられてしまわないようなくみを考えれば、それは、シオニズムを掘り崩す思想となり、社会運動となって、パレスチナとイスラエルの現状を変える力となるかもしれない。

筆者がニュージーランドの先住民であるマオリ民族の事例から定式化したような、一方では双系的な血統による系譜を尊重して歴史的正義の実現を追求する出自を共通にするものたちの遺産継承集団であるとともに、現在の近隣居住者による地域コミュニティとしては、居住地とその周辺を自然環境を保全してのちの世代に伝える遺産授与集団としての部族に諸個人が同時に帰属するような、新部族主義的なしくみは、そのような可能性を持ち得ないだろうか。（新部族主義について、詳しくは、岡野内 2009 参照）。

3. ユダヤ民族主義からユダヤ部族主義へ

そのような視点から現代ユダヤ思想の流れを見れば、とりわけ 1982 年のイスラエルによるレバノン侵攻とパレスチナ難民キャンプ虐殺事件をきっかけに、ユダヤ民族主義におけるナショナリズム的なものが相対化され、各地のユダヤ人コミュニティの独自性を尊重するという意味で、いわば部族主義的な転換が見られると言いうる。（詳しくは、岡野内

2008-09 参照)。

4. ディアスポラ主義

ボヤーリン兄弟のディアスポラ主義は、ユダヤ人コミュニティの連帯の原理としての「ユダヤ民族」の概念までも否定するものではないが、領域に対する排他的権力につながる主権概念を否定し、ディアスポラ・コミュニティとして、他の非ユダヤ・コミュニティとの共存の原理を主張する点で、この動きを徹底させている。(Boyarin & Boyarin 1993=2008。なお、サンドのユダヤ民族形成神話批判は、「ユダヤ民族史」と「ユダヤ教史」とのからみあいを見ごとにほぐし、シオニズムの「ユダヤ民族」概念を歴史学的に解体した。Sand 2008 参照。この文献については、シンポジウムの席上で板垣雄三氏の教示を受け、その後入手して参照した。)

5. 「イスラエルへの帰還」から「イスラエルからの帰還」へ

こうして、ヨーロッパのユダヤ人たちがパレスチナに「帰還」する権利があるという考え方は、アラブ人による外部からの批判だけでなく、ユダヤ思想に内在するかたちで、内部から崩壊した。こうして、イスラエルや全世界に追われたヨーロッパ・ユダヤ人のヨーロッパへの帰還の権利が問題となるが、そのためには、実は、国際社会によるナチズムの清算が必要であった。ナチズム（それじたいは、近代のヨーロッパ・ナショナリズムの排他的性格を極限まで推し進めたという側面を持つ）によるユダヤ人迫害に対する正義回復の措置は、まだ完了してはいない。岡野内 2008-09 では、この点を強調した。ヨーロッパの先住民としての各地のユダヤ教徒共同体（諸部族）の先住民の権利が問われているのである。

6. パレスチナ環境の危機とシオニズム

イスラエルのユダヤ人は、さらに深刻化する環境問題によっても脅かされている。(Tal 2002 および岡野内の 2009 年度現地調査報告を参照)。パレスチナの自然環境とのエコロジカルな調和を求め、人間中心主義を批判するエコ・フェミニズムによっても、シオニズムは、内在的な批判にさらされている（たとえば、Gorney 2007 参照）。どうじに、それは、パレスチナとの共存を展望する道にもつながっている。

おわりに

ポスト・シオニズムが語られてすでに久しいが、イスラエルの選挙の動向と政治状況を見る限り、シオニズムが実際にどのような形で解体され、変貌をとげるかは、いまだ明らかではない。だが、筆者が本稿で示したように、ディアスポラを受け入れ、自分の系譜につながる全世界のユダヤ教徒の諸部族への帰属を尊重するとともに、パレスチナで異教徒のアラブ住民とともに形成する新しい住民部族への帰属意識をも持つ、新しいユダヤ部族主義の方向が、ひとつの、しかも紛争解決にとっては望ましい選択肢として浮上してきつつあることは間違いない。すくなくともそのような感触を報告者は、イスラエルでのユダヤ系の人々との対話から得ている。とはいえ、それが、具体的にどのような政治的な形態をとって現れるかは、いまだ不明であることはいままでもない。

[文献]

- Ben-Rafael, Eliezer and Yochanan Peres, 2005, *Is Israel One? : Religion, Nationalism, and Multiculturalism Confounded*, Leiden, Boston: Brill.
- Boyarin, Jonathan, and Daniel Boyarin (ジョナサン・ボヤーリン、ダニエル・ボヤーリン), 1993, *The Power of Diaspora*, (赤尾光春・早尾貴紀訳『ディアスポラのカーユダヤ文化の今日性をめぐる試論』平凡社, 2008年) .
- Gorney, Edna, 2007, “(Un)Natural Selection: The Drainage of the Hula Wetland, An Ecofeminist Reading,” *International Feminist Journal of Politics*, 9(4):465-474.
- 岡野内 正, 2008-09, 「パレスチナ問題を解く鍵としてのホロコースト(シヨア)とナクバに関する正義回復(リドレス)」(上・中・下)『アジア・アフリカ研究』48(3): 16-30, (4), 49(2).
- , 2009a, 「<民族>を超える<部族>—『暴力の文化』を克服する公共圏の創出」佐藤成基編『ナショナリズムとトランスナショナリズム』法政大学出版社.
- Rabkin, Yakov M., 2006, *A Threat from Within: A History of Jewish Opposition to Zionism*, London, New York, etc.: Zed books.
- Sand, Shlomo, 2008, *Comment le peuple juif fut inventé: De la Bible au sionisme*, Traduit de l'hebreu par Sivan Cohen-Wisnfeld et Levana Frenk, Paris: Fayard.
- Tal, Alon, 2002, *Pollution in a Promised Land: An Environmental History of Israel*, Berkeley, etc.: University of California Press.
- (本報告は、文部科学省特別教育研究経費による「民族紛争の背景に関する地政学的研究」プロジェクトの助成を受けた研究成果の一部である。)